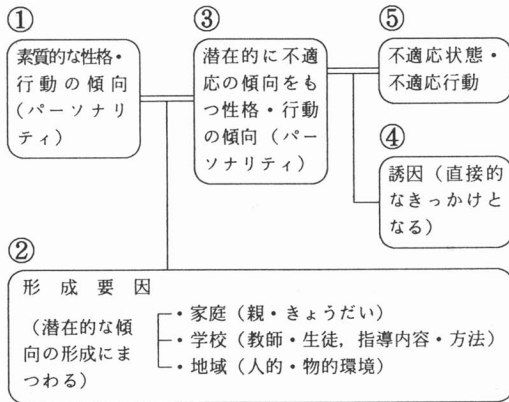


「不適応状態・行動」の生じる過程

<表1>



Ⅲ 研究の実践

1. 研究対象学級の実態把握

(1) 適応性診断検査 (Diagnostic Adjustment Test) の実施

中学1年生 男子18名 女子16名 計34名

<表2>

結果 (3. 7. 5実施)

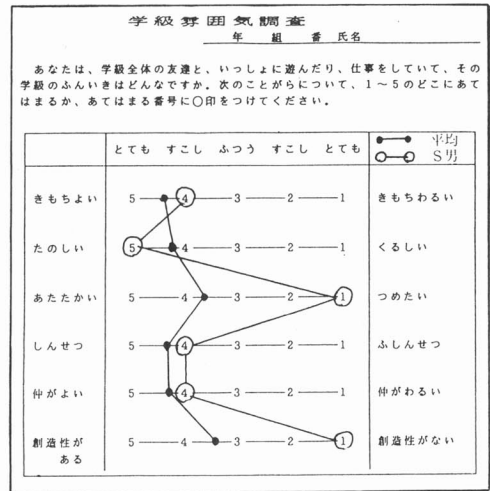
<検査の結果> A =危険性大 B =やや危険性大	A		B	
	男	女	男	女
① 適応傾向に問題をもつ型	1	0	1	1
② 性格傾向に問題をもつ型	0	0	0	2
③ 規範逸脱傾向が著しい型	0	0	1	0
④ 適応傾向と性格傾向の両方に問題をもつ型	0	0	0	2
⑤ 適応傾向に問題をもち、規範逸脱傾向が著しい型	0	0	1	0
⑥ 性格傾向に問題をもち、規範逸脱傾向がつよい型	0	0	0	1
⑦ 適応傾向、性格傾向に問題をもち、規範逸脱傾向のつよい型 (MPNタイプ)	1	0	0	1

(2) 結果の考察

本検査は潜在的問題の早期発見を目的とするが、「やや危険性大」は女子が男子の2倍以上で、女子の型はすべて「性格」にかかわる問題傾向が見られる。本学級では男子より女子が潜在的問題を多くもっていることが分かる。「危険性大」の男子2名と同様、今後は顕在的問題に発展しないように、予防的指導が重視される。

(3) 学級の実態

<表3>



① 検査の結果、男女共に居心地の良い雰囲気だと感じている。

② 建設的な意見を持っていても、それを支える人間関係がまだ育っていない。

③ 役割の自覚が希薄で、係活動は活発とはいえない面がある。

④ 決まりよりも利害によって行動し、人間関係が表面的、形式的な生徒が何人か見られる。

2. 指導援助の実際

—S男の事例—

(1) S男の実態と問題点

検査から次のような点が指摘される。

① 「適応性診断検査」の結果

MPNタイプである。(表2の⑦参照)

MPNタイプの特徴は、適応傾向・性格傾向・規範性逸脱傾向の三領域全部に問題を持ち、かなり危険度の高いタイプであり、